The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『松浦宮物語」における漢籍利用に関するいくつかの問題
Author(s)	中本, 大
Citation	詞林. 1994, 15, p. 61-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『松浦宮物語』における漢籍利用に関するいくつかの問題

中本　大

一、金日磾と鄧皇后

その学才を嘱望され、唐土に遣わされた主人公、橘氏忠の皇帝からのあまりの鍾愛ぶりを嫉妬した近臣の誹謗を受け、皇帝自ら次の如き言を示した。

漢武の金日磾　我国の人にあらさりき　人をもちゐることハ　たゝそのかたち心にしたかふへし（1）

異国に渡り皇帝の信頼を獲得し、後に少主を補佐する任も委ねられた氏忠の立場が『漢書』所収、「霍光金日磾」伝（2）に採録されている霍光、金日磾二人の事蹟に類似していることは既に先学が指摘される所であった。萩谷朴氏は論考「松浦宮物語作者とその漢学的素養」（3）の中で次のように述べておられる。

松浦宮物語の作者は、まことに奇妙な癖の所有者である。若彼が、作中の一人物を史上実在の人に比べて、「彼は某のやうだ。」と云つてゐるなら、それは作者が、その人物のモデルを当の史実から悉皆貰つて来たのであるといふ事を明白に公言してゐる事となるのである。これは作者が読者を見下した一種の放言にも均しい。このやうな事は、ひとり人物構造のみに限るものではないが、この物語の主人公たる弁少将と金日磾との関係の如きは、その著しい例の一つである。……〈中略〉……松浦宮物語は、漢書そのまゝの翻案であると云つても過言でない程に見える。以上の理由よりして、作者が弁少将のモデルとして、その性格や行為に、金日磾といふ史上の人物を漢書より移入し来つたものである事は明白であろう。……〈後略〉

即ち、「全て原書によつて、中国人と同一の立場にあつて、中国の歴史を眺めてゐた我国上代の知識人にとつては、金日磾なる人物は中国人間に於けると同様に顕著な存在であつた筈である」（萩谷氏）ため、こうした翻案（氏は「読者を見下した放言」と記されたが）を物語上の汚点とされたのであった。

事実、『文選』所収、左思「詠史詩」の第二首、

金張籍旧業　七葉珥漢貂

及び、第四首、

朝集金張館　暮宿許史廬

等の措辞の如く、七葉、つまり子孫末代までの栄華を創した金日磾の名は張湯と並称され、貴顕の象徴として本国の詩文の中でも盛んに引用される所であった。一例を挙げると、類書『初学記』「貴」門の事対で逸事の引用と共に掲げられた「七葉」「金張」の措辞は、『本朝文粋』にも、

散卒降虜之士　貂蟬伝七葉之風
蒭牧賈豎之家　出入歩五華之月
（巻第九　大江以言「早夏陪宴云々詩序」）

其外金張華族之家　風月藻思之輩
（巻第十　同「七言暮春施無畏寺眺望」）

右掲、大江以言の作例を確認し得る他、『雲州往来』『泥之草再新』等にも見出せるものであり（4）、平安時代中後期を通じて、公卿間に親炙したものであったことが窺えるのである。そして何より、後掲、『明月記』建保元年五月十九日条に、定家自身の手に拠って「金日磾之忠」が言及されているという事実もある（5）。

老尼之通身無故辛苦、心神恍忽、而徒在臥内、僅見旧史暫慰心緒、只思後学、有楊子雲之才、有金日磾之忠

建保元年、定家は齢五十二歳である。老年にさしかかった彼が心中共感し、敬愛し得る人物として揚雄と並んで金日磾が積極的に評価されているのである。

かかる定家の金日磾への傾倒を勘案した時、『松浦宮物語』作者が、単に人物造形の手間を省くために唐土の偉人に言及したとは短絡できないのではなかろうか。確かに今日的な評価では読者を意識してモデルを韜晦する技法に高い評価を与えることが多いであろう。しかし、この物語があくまで執筆当時の定家自身の興味を反映したものであり、自己表白であるとするならば、金日磾の手腕に比肩し得る人物としての主人公、弁少将氏忠を強く印象付けたかったとは考えられないであろうか。

『松浦宮物語』が数多の擬古物語群、中でも『狭衣物語』にもその書名の見える『からくに』の物語や『浜松中納言物語』等、中国に舞台を設定した作品に類似した構想を持つのみならず、『宇津保物語』『源氏物語』の構想や人物造形をも高度に摂取、利用していることは言を俟たない。しかし、定家の興味が漢文よりも和文にあったならば、漢故事や漢知識の利用はそれとは全く異なる別の手法によって作中に取り込まれていると見なすべきではなかろうか。

かかる観点からすると、物語後半部の女主人公となる鄧皇后も金日磾同様、作者自らがそのモデルを明らかにした好例と称し得るのである。

作中の「鄧皇后」がその姓から後漢の和帝の后、漢六后の一にも数えられた（6）和熹鄧后の事蹟に材を採ったであろうことは荻谷氏も指摘される所である（7）。『後漢書』の記述に拠ると、実在の鄧后も容貌美麗にして恭粛小心、高徳の賢婦人であり、帝の死後、二帝を輔佐し、自ら徳政を多くしたことが

知られ、物語中の鄧皇后の為人にも合致し、定家が依拠したのことは間違いのない所であろう。であるならば、作者定家は、物語後半の二人の主人公―弁少将と鄧皇后―の境遇を、正史、それも三史に所収された偉人の伝記に具体的に比し、その為人の卓絶なることを明確かつ鮮明に読者に印象付ける効果を狙ったとは考えられないであろうか。当然、前漢の金日磾と後漢の鄧后の間に史書の上では何のつながりもなく、また、唐土においても後代の伝奇等で二人が結び付けられたり、同出する例は未だ見出してはいない。実際、物語内部でも、設定された境遇の点では両者各々モデルに準じているものの、展開の中ではかかる要素は副次的なものとなり、現実の事蹟とは一線を画した超人間的側面に主眼が注がれていくことは周知の如くである。しかし、定家は唐土に舞台を設定した時、読者の側からしてもその性格の想定しやすいような具体的な人物モデルを準備したのであった。それは決して「放言」などと短絡すべきものなどではなく、異国の人物を描く上では有効な手段だったのである。

二、「しやうさん」は「商山」か

唐土に渡った弁少将は月夜に彷徨する中、老翁陶紅英に邂逅し、華陽公主より琴の伝授を受けるため、「しやうさん」に赴くべきことを教示される。物語構成の重要な要素の一つである琴の伝授の発端となる場面である。さて、ここで琴の名手、華陽公主のこもる場所「しやうさん」については、先学諸氏、ほぼ「商山」の表記を宛てることで異論がないようである。

萩谷氏は『読史方輿紀要』を閲せられ、その表記を検討された後、「湘山」・「商山」を候補として掲げ、

とりわけ商山は湘山よりも更に長安に近く、作品の構想に叶った立地条件を備えている上に、『白氏文集』の中にもその名が頻出しているので、作者にはより親熟した地名であったと思われる。

とされ、「全般に見て、作者が作品の世界に設定した距離感が、地理的事実に比して狭少に失するのは、大陸の広大を体験せざる平安人士として、無理からぬところであろう。」と些か問題点を指摘されながらも、「商山」をより好ましいものと結論付けられたのであった（8）。

吉田幸一氏も萩谷氏の説に同意された後、『唐物語』との関係を指摘されて、

ところでこの商山は、『唐物語』第十七の商山四皓に見える山である。『唐物語』では、「商山といふ山に世を遁れつゝ、帝の召すにもまゐらで、こもりゐたる賢人四人」とあるやうに、秦の乱を避けて隠れた四人の話である。尤もこの出典は、『史記』留侯世家や高士伝であらうから、『松浦宮』の作者が原典を読んで書いたとも見られようが、なほ『松浦宮』では、氏忠が華陽公主を訪ねて契を結び別れる条に、

「この楼はむかしひぢりのたておきし時より、いさぎよき地としてさらにみだるゝことなし。日月そらにしり、地神しもにまもりたまふ所也。山のさますぐれてふかき琴のねにかなへるによりて、この所をしめてこのしらべをならふこと、七年になりぬ。云々」

とある「むかしひぢり」といふのは、四皓を指してゐることを挙げておく。

とまとめられ、萩谷氏の説を補強されたのであった（9）。

確かに萩谷氏の説の如く、実際上の地理との不整合は問題ではないとしても、「しやうさん」の表記に「商山」を宛てることについては、以下の点から多少の疑問が存するのである。

第一に、琴との関係である。琴は棋・書・画と並ぶ神仙や隠者の玩物であり、仙人に擬せられる商山四皓にしてみればそれだけで要件を満たしているとも見なされよう。しかし、四皓と琴を繋ぐ密接な要素は見出し得ず、「琴の伝授」という物語の重大な要素の背景となるには最適とは言いきれない面が存在するのである。

第二に、楼との関係である。吉田氏は「むかしひぢり」の建て置いた楼閣を商山四皓の住まいの如く解しておられものの、四皓が商山に楼閣を構えたという逸話は遺憾ながら管見では見出し得ないのである。

更に、先述の如く、作者定家が唐土の事物を描くにあたり、かなり具体的なモデルを明らかにしつつ利用していたことを勘案すると、この「しやうさん」も琴のイメージを喚起させる何らかの具体的背景を伴った地名であると考えるべきではなかろうか。

事実、右の観点からして注目すべき「しやうさん」の記述が次掲、西野本『仲文章』の「吏民」編所収の対句の双行注の中に見出せるのである。

師広顰眉　哭於琴前

于広恨天　避於楼前〈周書曰、師広者斉朝臣也。能調琴、足被重。即当皇之不治、懐嘆而入松山。〉（括弧内が双行注）

即ち、琴の名手であった「師広」なる人物が帝の不豫に当たり、嘆いて「松山」なる場所に籠ったという逸話である。

『左伝』や『史記』・『韓詩外伝』・『淮南子』等各書で言及される師広は春秋時代、斉ではなく晋の平公に仕えた楽聖である。その逸話は『蒙求』等にも採録されており、本国にあってもその名の親炙していたと思われる人物である。しかし、この記述、西野本を底本とした『諸本集成　仲文章注解』（幼学の会編）で記された注釈でも、現存の『周書』と想定し得る各書（『逸周書』『汲冢周書』）には合致する「師広」の記事は見出せないこと、『史記』の記述に見える「師広」は「斉」ではなく「晋」の朝臣であること等を指摘し、「松山」に関しても、

あるいは「師広」と「商山四皓」の「四皓」とを混同する

か。もしそうだとすれば「松山」は、「商山」をその音により誤って宛てたものかもしれない。

と推論を呈示されるのみである（10）。確かに「松山」なる固有の地名や山名は地理書や類書等にも見出せず、所収の故事や或は類似した逸話も管見では他書への収載を確認し得ていない。しかし先にも述べた如く、商山四皓と琴を結ぶ接点も明確でなく、「師広」と「四皓」を混同する合理的要因も、音の類似以外にはないのであれば、やはり右の推論には疑問を呈せざるを得ないのである。

更には「楼」との関係もある。先掲、『仲文章』本文で師広と対句を為していたのは「于広」の逸話であったが、彼が避（去）ったのが「楼後」であったというのは注目すべきであろう。「于広」の説話自体は「師広」及び「松山」と直接関連するものではないため推論は控えるが、「琴」と「楼」という『仲文章』所収の一聯の対句中に描かれた事象が『松浦宮物語』で描かれた「しやうさん」の重要な素材となっていることは銘記しなければならないであろう。

何れにせよ、第一に確認すべきは、「しやうさん」と琴を繋ぐ逸話が十一世紀以前には成立しており、教訓書（初学書）の類にも引用されていたという事実である。先に引用した先学の考察のように、現存する正統な史書等では言及されていない説ではあっても、『宝物集』にも引用された『仲文章』の本文理解が、定家とは位相を完全に異にするものであったとも考えられず、「しやうさん」は「師広」の逸話に基づく「松山」である蓋然性も決して低くはないように思われるのである。逆に、「金日磾」や「鄧皇后」の例を勘案するに、定家であれば、地名の選択に際しても、具体的なイメージが伴うことに腐心していたに相違ないとも考えられるのである。

以上、検討してきたものは、物語の展開に深く関与してくるような事例とは一線を画するという叱正もあるだろう。しかし、唐土に材を採って物語を成すに際し、作者が往時の公卿であるならば、その典籍や文物への通暁の程度が試される側面を持っていたこともまた事実であろう。それが定家の最も意を注いだ点かどうかは別として、作中の登場人物や地名は、―遣唐船の航路や他の登場人物の名にしても同様―往時の一般的な貴族の理解を超越することなく、具体的な図像を喚起させるに充分なものが選ばれていると言えるのではなかろうか。換言すれば、定家の漢籍への興味は、製作当時の知識人等の規矩から逸脱したものではなかったとも結論付けられるであろう。

注

（1）『松浦宮物語』本文の引用は原則として伏見院宸翰本の翻刻（古典文庫所収　吉田幸一氏）に拠った。

（2）巻第六十八、霍光金日磾伝第三十八。

（3）「国語と国文学」（昭和十六年八・九月）所収。

（4）『雲州往来』（群書類従本）では「昨日被定侍中。或管

絃和歌。皆是貂蟬七葉之家。如金日磾者也。」とあり、『泥之草再新』では、「秋日陪左相府書閣守庚申同賦蘭以香為貴応教。風字。」と題された六韻の第一聯で「匂含許史連枝露　気襲金張七葉風」として言及されている。

(5) これに関しても萩谷氏の言及がある（角川文庫本『松浦宮物語』注釈参照）。

(6) 後代の類書では宋代、王応麟編『小学紺珠』巻七「氏族類」等でも言及される。

(7) 注（5）に同じ。

(8) 注（5）に同じ。

(9) 安田孝子氏編『異本　唐物語』（古典文庫）所収「『唐物語』の成立年代考」。

(10) 厳密に言うと音の開合の点でも問題が存する。『類聚名義抄』を見るに、「松」の反切音が「聚恭」であるのに対し、「商」は「舒羊」と異なるのを始め、『色葉字類抄』でも「松」には「しよう」、「商」には「しやう」の仮名を宛てる等、「しやうさん」の表記に「松山」を宛てるに関しては音韻上不明な点も存するのである。

（なかもと・だい　本学大学院博士後期課程）